

+ 36 【おでんさん】

いわゆる幽霊というものは、めったに見たことがないのですが、その夜は、妙なくらい静かだし、風がなまぬるく、月がかすんでいたのので、でてきたのでしょう。

我が家の庭のすみにある、便所からもどってくるときに、気づいたのです。

粗末（そまつ）な着物を着て、顔蒼白く、寒そうにでてきましたが、隣のお姉さんに匹敵（ひってき）する美人でした。

「どなたさまでやんすか。おいわさんかろう、それともおきくさんかろう」

ときくと、幽霊は、

「あちきは【おでんさん】です」

と、いかにも女らしい声でいいました。

「そうでやんすか。だどもわしは、ざんねんながら、おんなぎらいでろう。おんなずきのところにでてくれんかろう」

「そんな殺生なこといわないでね。あちきだってそれなりに選んででているんですもの」

【おでんさん】は色っぽい声でいいました。

「そらあ、えらびまちがいじゃ。もうちっとは、ゆうれいをこわがるものところさ、でるがいいぞ」

「そんな冷たい仕打ちしないでね。こわがるとかこわがらないとか、あちきには関係のないことですわ」

【おでんさん】はいささか拗（す）ねてみせました。

それがまた女らしい。

女好きにはたまらんだらう。

「まんずそこはさむかろう。さゆでもいれるからろう」

湯を湧かすために土間（どま）のほうに行くと、お伝さんは静かに泳いでついてきました。

そうしてぼくの耳もとで、こう囁（ささや）きます。

「ごらんのとおり、あちきは足はもちろん下半身がありません。ですから、せっかくですが、飲んでもおもらししてしまうんですわ」

おもらしさせてみたい気もしたけれど、
「それはすまんことで」
と謝りました。

【おでんさん】は変にしなしなとして、
「あやまってくれる代わりに、あちきの身の上話をきいてくれませんか
と」

「きいても、わしにはどうにもできん。ほこらのじいなら、どうにかし
てくれるかもしれん」

ぼくの言葉に、なんとなく【おでんさん】の顔に赤みがさしてきた感
じがしました。

「それならそうしますわ。祠の場所を教えてくださいませんか」

ぼくは庭の土に、枯れ木で地図を書いてあげました。

「ほこらのじいを、わしはかいじいとよんどる。みのうえばなしをきい
とくれて、さいしょにかならずいうんじゃぞ。でないと、たいじされ
るからのう」

「あい、わかりました」

幽霊は消えた。

ぼくは安眠しました。

翌早朝、小学校へ行く前に懐爺のところに寄りました。

「【おでんさん】、どうやったかのう」

「竹輪（ちくわ）と大根（だいこん）が旨かったです」

懐爺は煮ても焼いても食えない。

「とぼけるでない。びじんがきたじゃろ」

「やっぱり金ちゃんの紹介（しょうかい）ですか。でなければ、幽霊と
はいえ、あんな美人がわたしのところにくるわけがありません」

「そいでもって、かいじいは、【おでんさん】と、ねんごろになったの
かのう」

「なにをいうんですか。年寄りをからかうもんではありませんよ。それ
に【おでんさん】は下半身がないではありませんか」

懐爺は赤くなった。

「そいでも、そいねぐらいはしたじゃろ」

「いやですよ金ちゃんは。【おでんさん】の身の上話の内容をききにきたんでしょ」

「それはそうじゃが、じかんがすくないからのう。あとでゆっくりきこうかのう」

「まあそういわずに。かいつまんで話しますから、きいてやっておくんなまし」

後半は声色（こわいろ）を使っていった。

懐爺も役者やのう。

「ならば、きいてやるかのう」

ぼくは地べたに腰をおろしました。

「金ちゃんは知らないでしょうが、明治時代（めいじじだい）に高橋お伝という有名な女性がいて、世間からは毒婦（どくふ）といわれていました。色仕掛（いろじかけ）で男を騙し、殺して、金を奪っただけではなく、裁判でも、嘘八百（うそはっぴゃく）をならべたてたからです。けれども私見（しけん）では、お伝さんは同情したいほど人生の苦勞をした人です。農家の出で、最初の夫が癩病（らいびょう）になりましたから、それから人生が狂いました。けっきょく斬首の刑になったんですが、情夫（じょうふ）の名を叫んで暴れたので、さすがの首切り浅右衛門も、斬り損ねて何度も刀を振るい、お伝さんも血まみれでもがきさわいで、じつに哀れをもよおす最期でした」

懐爺は見て来たふうにいいました。

「そらあ、ばけてでたくもなるわのう」

「いえ昨夜の【おでんさん】は、それから遡（さかのぼ）ること百年、江戸時代（えどじだい）のお伝さんです」

ならば先にそれをいえ。

「わしはじかんがないんじゃ。かいじいは、わしをちこくさせるつもりかのう」

行こうとすると引き止められました。

「小学校は消えませんが、でも幽霊は消えますから、話を最後まできいてください」

「いわれてみればそうだのう。ちこくのけいは、ざんしゅのけいより、かるいだらうからのう」

「それで、江戸のお伝さんですが、こちらも男なしではいられない農家の女性でして、れっきとした奥さんのいる、お侍にお熱をあげました。それであれこれ画策（かくさく）して、このお侍の屋敷に女中として入り込みました。それで時を経ず、うまい具合に関係をもてたのですが、そのお侍が大変出世しまして、お伝さんのことが邪魔（じゃま）になった。ひまをだせばいいのだけれども、あちこちであれこれいわれてもまずいと、お伝さんを毒殺せんとしたのです。そしてお伝さんと呼んで自らお茶をふるまった。そんなことは初めてですから、殺されるとも知らず、お伝さんは感激していた。ところがどうまちがえたか、お伝さんのお茶ではなく、お侍のお茶に毒がはいっていて、お侍は死んでしまいました。これもどういうわけか嫌疑（けんぎ）がお伝さんにかかって、文字通り毒婦だということで処刑されることになりました。その処刑の方法が、〈蛇壺（へびつぼ）の刑〉といって、残酷（ざんこく）なものでした。大きな壺のなかに、裸にしたお伝さんと蛇を百匹いれ、酒を注いで蓋（ふた）をする。しこたま酒を飲んで苦しがつた蛇が、お伝さんの身体の中にもぐりこむというものです」

「かいじいは、わしをこわがらせるつもりかのう」

ぼくが文句をいうと、

「これくらいのことで、怖がる金ちゃんではありませんよね」

「こわがらんが、いやなきぶんになったのう」

こわいといやなきぶんとを比較すると、同じくらいですか。

「すみませんねえ。でもこれらは、【おでんさん】が昨夜わたしに話したことなのです。明治のお伝さんの話をしたのは、明治のお伝さんも哀れですが、江戸のお伝さんはもっと哀れという比較（ひかく）ですね」

「わしは、ひかくとしかくは、すかん」

これは嘘です。

懐爺は嘘だとわかっているので、ぼくの言葉はあっさり無視（むし）しました。

「金ちゃんの好き嫌いはともかくとして、【おでんさん】の話を一から十まできいてあげたら、それだけで【おでんさん】は満足して消えました」

「わしはいやなきぶんになったが、【おでんさん】はよいきぶんになってよかったのう」

「はい。冤罪（えんざい）をだれにもしられないというのは、〈蛇壺の刑〉くらい辛く苦しいものです」

「なるほどのう。それにしても、にんげんはおばけよりも、ざんこくなもんじゃのう」

ぼくはようやく小学校にむかって走りはじめました。

当然遅刻です。

〈遅刻の刑〉は〈蛇壺の刑〉くらい辛く苦しいものでした。